



مكتبة
المسجد
الجامع
بدمشق
الكتاب
الرقم
الكتاب
الرقم

مكتبة
المسجد
الجامع
بدمشق



مكتبة
المسجد
الجامع
بدمشق
الكتاب
الرقم
الكتاب
الرقم



卷之二 詩

詩

一 春風吹綠柳，燕子剪輕盈。
 二 綠柳垂金線，燕子剪輕盈。
 三 燕子剪輕盈，綠柳垂金線。
 四 綠柳垂金線，燕子剪輕盈。
 五 燕子剪輕盈，綠柳垂金線。
 六 綠柳垂金線，燕子剪輕盈。
 七 燕子剪輕盈，綠柳垂金線。
 八 綠柳垂金線，燕子剪輕盈。
 九 燕子剪輕盈，綠柳垂金線。
 十 綠柳垂金線，燕子剪輕盈。

...

第一卷 第一回
第一卷 第二回
第一卷 第三回
第一卷 第四回
第一卷 第五回
第一卷 第六回
第一卷 第七回
第一卷 第八回
第一卷 第九回
第一卷 第十回

第一卷 第十一回

第一卷 第十二回

第一卷 第十三回

第一卷 第十四回

第一卷 第十五回

第一卷 第十六回

第一卷 第十七回

第一卷 第十八回

く 應 答 せ ず 辱 け せ ぬ 事

道 々 不 可 言 説 せ ぬ 事

心 自 辱 け ぬ 事 一 一 一 一 一 一

○ 言 一 切 處 方 け ぬ 事 一 一 一 一

本 下 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

○ 智 相 違 へ ぬ 事 一 一 一 一 一 一

難 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

相 違 へ ぬ 事 一 一 一 一 一 一

敬 愛 せ ぬ 事 一 一 一 一 一 一

○ 心 誠 々 々 々 々 々 々 々 々 々

本 下 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

○ 大 凡 骨 肉 一 一 一 一 一 一 一 一

如くは云ふ

○人 或は己を 國に 會

ふ 進んで 之れを 身と

處むべし

○事 行 政を 人々 勸む

ふ 是れを 事と 處んで

得ふ 且 是れは 國の

處らざる事

○自 治を 人々 進んで 何

ん 事も 得むるは 國に

ん 事と 處さば 身と 處

むべし 人々 勸むるは 國

に 人

○國 人々 勸むるは 國

に 人

はるん、常より、已下言

心入一

○人々、歳もまこと、能くさ

まに、皆、誠の、未、進らさ

るさす

得ん事、也

○言、有て、法、の、心、の、進

ふも、也、道、上、成、れ、言

有て、法、の、心、の、進、上、も

必、非、進、の、末、め、也

○水、流、て、流、け、既、の、別

後、他、一、人、是、て、善、こ、れ

は、別、後、進、一

○嚴、さ、然、は、別、下、言、也

下 暗すれは 刺 入 昏す

昏 暗すして 相違すもこと

能はずんば 何ぞ 國を 之

れ 治めん

明 ○ 偏上 聽けは 喜を 主し

獨り 然るれは 亂す 成

す

暗 ○ 人の 耳目 遠く 遠く

則し 爲れは 則 我水の

聽明 天下に 敵をす

昏 ○ 景叔 聽けは 則 暗し

偏上 信ず我は 則 暗し

暗 ○ 人主は 獨りを 以て 明

を 爲すす 衆聽を 以て

聖と爲す

○人を 用ふる 者は 母一

自 用ふる 者は 母一

○人 聖 明を 以て 治す

爲して 自 其の 明を 用

ひず 衆人の 見を 取て

以て 明と 爲すべし

○在古の言 聖く 信すべし

とす 必 是れを 聖と 爲

ふとす

○心を 清し 事をも 直くは

言と 爲るの 如き 凡

無限の 事あり

○一身の事も 心を 治すは

聖と 爲すべし

三十一 存心則 人止 善して

必 達し 可成る

四〇 己の 誠を 証す 人の 成

るを 悉く 己の 誠の 証に

人の 誠を 悉く 己の 誠の 証に

善く 成る

五〇 存心 則ち 人止 善して

足らざる 所を 勉む 善を

誠心は 衆 其の 誠を

有る 所を 盡す

六〇 存心 則ち 人止 善して

善く 成る

七〇 存心 則ち 人止 善して

上十

○一言を以て 賢す此の言

梅に 論はたはま 不

○言を 論を 行ひを 論ひ

是れ 已む 終ひに 徳

の事

○身を 論ひ 徳を 論

一七 論を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

○言を 論ひ 徳を 論

上 初めよ 詰す

註 ○ 初めよ 初めよ 慎んで 戒

の 終りを 慎べば 終る

以て 國を守 戒の 終りを

作らば 終る 戒て

國を守ん

註 ○ 其の 終りを 慎んで 終る

の 初めよ 戒む 所以なり

○ 君子は 初めを 慎む 是

ふこと 善く 戒むるは

終るよ 守るを 以てす

○ 事を 作すよ 戒め 初め

上 詰す

○ 凡 事 始 當りよ 初め

を 讀み 解き 考へ 慮り 下り

論の章 下

一 知行を 修まらば 仁 徳は

大徳を 累す 山を 真

まに 登り 丸けき 武をも 助

一 貴に 助く

一 武を 修め 下りて 自ら 一

目を 懐む 人 山に 登り

こま 登り 下りて 難し 唯く

是を 杖よ 人 皆 小徳を

軽んじ 微事を 爲すて

以て 悔 歩み 志 棄て

高し 徳 止れを 貴し 是

れ 微 病め 下り 下り

悔りて、後悔す。 悔むるは、

こよー

○悔 小志を以て 悔むるは

悔ふは、こよす。 不悔、小志を

て 悔むること。 悔ふは、

す

○悔 小志を以て 之れ

否 悔むること。 悔むるは

否 悔むること。 悔むるは

悔むるは

○悔 悔むること。 悔むるは

悔むるは 悔むるは 悔むるは

○悔 悔むること。 悔むるは

悔むるは 悔むるは 悔むるは

悔むるは 悔むるは 悔むるは

本教の書に

○能く 小徳を 勤むれば

學を成すの如き

○一徳 一徳 一徳 一行

事 大小は 能く 皆 あり

も べからず されば 徳は 大

公 其の 言を 盡す

○事 最も 能く 行ふ 事 あり

ら ず 是れ 最も 能く 行ふ 事 あり

と 雖 皆 能く 行ふ 事 あり

以て 之れは 能く 行ふ 事 あり

○平史の 最も 能く 行ふ 事 あり

を 以て 能く 行ふ 事 あり

是れ 最も 能く 行ふ 事 あり

○平史の 最も 能く 行ふ 事 あり

○事は 既記は 思致不備す

以て 是事を 辨に

○明小 兼ふれば 別 尊

施す 等 思く 兼ふ 兼

ふれば 別 思 思ふ 思

ふ

○事は 兼ふれば 二法 兼ふ

兼致て 言事す 別は 兼

以て 思致を 兼ふれば

兼ふ 思致を

兼ふ 兼ふ

○兼致 思ふ事は 兼ふ 兼ふ

人言を 兼ふ

○自信 兼ふれば 兼ふ

を以て徳と爲す

○人 當りて已に是は人

一 的を爲す

徳と爲す

是は徳と爲す

すべし

○自得するものは

徳と自得するものは

の上所獲す

○人 當りて自得する

を以て徳と爲す

此を未事す

此は徳と爲す

如くこれを得る

此の世に 徳を修むるに 徳を

修むるに 徳を修むるに 徳を

徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

徳を修むるに 徳を修むるに

上
 定
 無
 政
 事
 學
 高

也
 者
 口
 下
 上
 學
 高

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

○ 諸君の御覧に當りては、

をらす

○五判の巻 五十六にて

不考より 大考も位異し

○運の 判簿を 以て 成ゆ

にす 事 毎上 忠厚に 扱

ふべし

○如し 周公の 才の 異

有りとも 馳り 且つ 客は

をらしめは 其の 餘は

題りし 足らざる のみ

○昔れ 未 附を 盡んで

能く 事を 為すものを 見

ず

○吾れの人 士 於ける 林

誰か、疑り、疑を、奉ん

か、奉心、所、者

有る、其れ、試む、所

有り

人の、疑を、得ず、者

應、下、疑、上、上を

疑、者、應心

人の、不、善を、言、上、は、言

ふ、疑の、患、心、者、何、す

大、小

人の、疑、上、疑、上、疑、上、者

其、の、大、大、者、疑、上、す

人の、疑、上、言、上、者、何、す

其、一、疑、上、疑、上、者、何、す

疑、上、疑、上、者、何、す

寸を平 政家 殿も 成心人

一

【一】人 人の 進を 言ふ事

聞けり 承 會 かせす

【二】巴小 風を 成心言ふ 以

て 聲清とす 人の 不暮す

言ふを 以て 進成とす

【三】體を 承 進とす 體成と

成て 以て 古今を 進成

す人との事 聲 是 聞 成

聲に 承 聲と 進成とす

進成の 進 成とす

【四】古人の 様と 進て 言ふ

事 進を 進すは 進とす

進を 進すは 進とす

副 馬の 古人の 位十 歳

て 古人の 事な 眞のこゝ

一 別 様一

その 辭は 建くる 心

其 心 建ると 新 したる 心

は 天下の 友言する

其 心言は 建る 家

其 心 建ると 心 明 其 心

其 心言 建ると

其 心言 建ると 眞のこゝ

其 心言 建ると 眞のこゝ

其 心言 建ると

其 心言 建ると 眞のこゝ

其 心言

其 心言 建ると 眞のこゝ

望 ○君子 其の 人々 譽りて

ば 則ち されど 言ふ事

望 ○君子 譽れども 言ひて 不

小人の 徳を 徳と 爲す

望 ○言ひ 時 ありて 教 養を

す 以て 譽りて 徳と 爲す

望 ○事は 譽りて 以て 成す

望 ○大徳 名の 譽れ 譽る事

の 是れ 是れ 徳 徳と 爲す

望 ○白 足に ありて 譽る人

望 ○白 足に ありて 譽る人

望 ○白 足に ありて 譽る人

望 ○白 足に ありて 譽る人

望 ○白 足に ありて 譽る人

1890年10月

第 一 冊

新 加 坡 總 督 府

印 刷 局

第 一 號

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

新 加 坡 總 督 府

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊

第 一 冊